第２回　4大学間「学生交流自主的・実践的研究プロジェクト」
研　究　成　果　発　表　会

5　冒険遊び場　プレーパーク

発表者 ： 山根 幸治 さん

発表内容

題　目：冒険遊び場　プレーパーク

研究者：島根大学 教育学部 生涯学習課程
山根 幸治
藤川 浩一

はじめに

「子どもが自由に遊ぶことができる場所が身近にあるのだろうか？」 そう感じたのが、この活動を始めたきっかけだった。自分が公園の近くを通ってみると子どもが遊んでいる姿を見ることが少なく、遊んでいてもキャッチボールやサッカーなどのきまりきった遊びしかしていない。子どもの遊びはもっと多様性を持ち、自由なものだと思う。子どもが本当にしたいと思った遊びがあったとき、それが実現できるのだろうか？ おそらく、難しいだろう。遊ぶ場は限られているし、その限られた遊び場でも事故を未然に防ぐための禁止事項がたくさんあるのが現状だ。そう考えると子どもが自由に遊ぶことができる場が身近にないように思える。そう感じていたとき、禁止事項のない遊び場「プレーパーク」のことを知り、この活動に取り組むようになった。

2001 年 4 月にプレーパークを立ち上げ、今年で 3 年目になる。この活動がこのように継続していくことができているのも地域の方々をはじめ、多くの方々のご理解・ご支援・ご協力のおかげだと思う。今年度は、4大学間学生交流自主的・実践的研究プロジェクトなどのご支援もあり、より内容の濃い活動を行うことができたのではないかと思う。

以下、これまでの活動の経緯を簡単に触れ、今年度の活動について述べていこうと思う。

Ⅰ．プレーパークの趣旨

1,プレーパークの趣旨

プレーパークとは、子どもたちのもつ「何かやってみたい」という好奇心や興味を大切にし、それを実現できるようにする遊び場のこと。従来の公園などの遊び場では、事故や怪我を未然に防ぐために多くの禁止事項を設けているが、プレーパークでは「**自分の責任で自由に遊ぶ**」をモットーにし、禁止事項を設けていない。そのため、いろいろなところに危険がひそんでいるといえるが、プレーパークは、「危険があるから自らも注意するし、冒険心、挑戦心もわく。少しずつ試してみるから自分の出来ないことがわかる。一人で出来ないから仲間と協力することを覚える。そして、その中で小さな怪我を繰り返すことで、はじめて大きな事故から**本能的に自分の身を守ることができる**。」という考えのもと、ある程度の危険は必要だという立場をとっている。

また、プレーパークには「プレリーダー」と呼ばれる大人がいる。プレリーダーは、子どもの遊びのリーダーでもあり、子どもにとって大人の友達でもある。しかし、遊びだけがプレリーダーの仕事ではなく、子どもが気づかない危険を未然に取り除いたり、事故に対処したりなどその役割は多面に及ぶ。プレリーダーがいるからこそ、子どもは安心して自由に遊ぶことができるのである。

子どもの遊びの可能性を大切にし、それを阻害することのない遊び場がプレーパークなのである。プレーパークの目標は、地域社会の中に根ざした、日常的な遊び場になることである。

2,今までの経緯

現在、プレーパークは全国に１８０以上ある。2001年に松江でのプレーパークを立ち上げた。その当初、山陰地方には唯一のプレーパークであった。その後、持田のプレーパークが火付け役となり、現在では、松江市持田地区、同市城西地区、浜田市、鳥取県鳥取市、同県米子市の計 5 ヶ所にプレーパークが存在する。そのうち学生が主体となって活動をしているプレーパークは、私たちが活動している持田地区のプレーパークだけである。

2001年４月にプレーパークの開園・運営を行うボランティア団体を立ち上げる。同年、島根大学のサークルとして「プレプレまつえキッズ」となる。

2001 年 8 月、松江市持田公民館の協力を得て、公民館が管理する旧持田小学校跡地にてプレーパークを開園する。以後月一回のペースで開園を行う。

2002 年には、開園回数を月 4 回程度に増やす。また、「プレーパークの活動をもっと多くの人に知ってもらいたい」「持田以外での場所でも開園してみたい」という思いから、「デリバリープレーパーク」と称し、松江市内の公園を中心として、2か月に1回程度の持田以外での開園を行った。この年の開園は、持田でのプレーパークだけでのべ 46 回の開園を行い、年間約 1340 人の来園者が訪れた。

また、この年は冒険遊び場活動が大いに盛り上がり、前年度 2 ヶ所しかなかったプレーパークが3つ増えて5つになる。その動きにあたり、プレプレまつえキッズが中心となり、山陰地方の冒険遊び場活動のネットワーク化の第一歩となる「山陰プレーパークの会」を開催し、各々の活動報告等を行い、各プレーパーク同士いい刺激を受けることができた。

Ⅱ.Ｈ１５年度の活動

1,活動内容とその概要

①持田プレーパーキング（持田地区でのプレーパーク）

松江市持田地区の旧持田小学校跡地でのプレーパーク開園。日常的な開園の他に季節ごとのイベント開園などを行った。

②デリバリープレーパーク

持田以外の松江市の公園を中心に行う開園（Ｈ１５年度は、他の市でも開園）。持田地区の人たちだけでなく、もっと多くの人たちにプレーパークを知ってもらい、親しんでもらうことを目的とした活動。

③参加協力イベント

プレーパーク活動以外にも他の団体などに協力・参加して行う活動。Ｈ１５年度は、計 7 回行った。他団体へのプレーパークの理解・協力を図る目的がある。

④研修

プレーリーダーとしてのスキルアップを目指すもの。講師を招いての講義やロープワーク、応急救護などを行った。

⑤アンケートによる意見

開園に来ていた保護者の方何人かに簡単なアンケートをお願いした。その意見を通じて改善点などを探った。

2,活動の具体的内容

①持田プレーパーキング

Ｈ15年度は、月 3 回程度の開園で、計 33 回の開園。晴れの日も雨の日も関係なく開園を行った。旧持田小学校跡地は、何もないただの原っぱだが、多くの遊びが展開された。子どもの遊びには限界がないと思えるほど子どもたちはたくさんの遊びを創り出していた。そのいくつかをあげてみようと思う。

まず、手作りの遊具たち。滑り台や竹で作るジャングルジム（持田プレーパーキングではＳＡＩＺＯと呼ぶ）を子どもたちと一緒に作り上げた。広い原っぱにある大きな手作り遊具は、子どもたちプレーパークに現れたこの大きな遊具によじ登ったり、揺らしてみたりと楽しそうに遊んでいた。次に、ベーゴマ。鉛でできたコマをまわして、相手のコマを落としたら勝ちという昔ながらの遊び。これが、単純そうに思えてなかなか難しい。まず、まわすまでがなかなかできないのだ。ベーゴマをまわしただけで、大喜びする子ども、そして大学生や保護者の方々。見ているだけで十分楽しいのだが、まわせるようになって、相手に勝ったらさらに楽しい。次に焚き火。松江市では、焚き火は条例で禁止されているが、消防署の許可を取り、ほぼ毎回、焚き火をしている。子どもたちは、焚き火をした経験がないので、燃やすだけでとても喜んでいた。火は、子どもにとってとても魅力的なものなのだ。その焚き火を使ったベッコウ飴作りなども人気だ。あとは、プール跡を使ってのボール遊び、30 人を超す人数での鬼ごっこ、木工作や穴掘り、泥団子作り、変わったところだと泥を相手に投げつけて遊んだり、ずっと釘をぬいていたりと、多種多様な遊びがプレーパークには、あふれていた。

①－1　竹のジャングルジム(ＳＡＩＺＯ)

①－2　　手作り滑り台

①－3　焚き火で調理する光景

①－4　　ベーゴマで対決

①－5　雨の日にずぶ濡れで遊ぶ姿

①－6　　木工作

②デリバリープレーパーク

松江市内にある、楽山（らくざん）公園、総合運動公園、菅田（すがた）公園、北公園で。松江市外では、出雲市にある〈すのき広場、大田市の大田市運動公園でプレーパークを開園した。

楽山公園では、5月と11月の2回開園した。この公園は、山の中ということもあり、他の公園に比べて周りに太く大きな木がたくさんあったため、木を取り入れた遊びを楽しんだ。木の枝とロープを使って梯子を作り、子どもたちは必死になって木によじ登り高いところでのスリルや登ってきた達成感などを味わっていた。また、公園内の大きな池では、ザリガニつり、山では野いちごとりなど自然と触れ合いながらの遊びを楽しんだ。

総合運動公園では、4月と9月に。菅田公園では、4月と8月、北公園では、12月に開園した。これらの公園は、持田と離れているため普段の開園とは違った子どもたちが多く来ていた。子どもたちの他にも地域の方々が開園の様子を見られ、立ち寄って下さった。特に地域の方々は、子どもに昔の遊びを教えたり、当時の環境のことなども話されたりなど、プレーパークの目指す様々な世代間の交流も見ることができた。

大田市での開園は、NPO法人おおだ子どもセンターの主催のもと 8 月 9 日に開園した。台風の影響で子どもはあまり来なかったが、松江から遠く離れた大田市の子どもセンターさんと交流をもつ機会を得ることができたことに大きな意味があったと思う。

〈すのき広場の開園は、出雲市女性センターさんの依頼によって、10 月 18 日に実現

した。くすのき広場で行われた女性センターさん主催の祭りのイベントの一つとしての開園だったが、近所の保育園の子どもたちや、子どもたちの保護者の方々などが一緒に遊ぶ姿を多く見ることができた。焚き火の火起こしを手伝ってくださったお母さん方など、大学生との交流も多々あった。とても楽しい時間を過ごすことができたように思う。

これら既存の団体との関わりがもてたことは、プレーパークの活動が認知されていることを感じるとともに、これからプレーパークの広がりにとっても有意義なものだったと感じた。

②－1　　楽山公園での木登り

②－2　　ザリガニつり

②－3　　北公園での開園

②－4　くすのき広場での開園(出雲市)

③参加協力イベント

〇持田夏祭り（7 月 26 日）

持田地区の地域行事の一つ、夏祭りに参加した。プレーパークが持田を中心として活動しているかぎり、地域の人の理解や協力は不可欠であるため、地域の人との交流を深めようという目的のもと参加した。普段プレーパークに遊びに来ていない地域の子どもや地域の大人の方々と一緒になって、ベーゴマ勝負をしたり、盆踊りを踊ったりなど、大学生ともどもとても有意義な時間が過ごせたと思う。

〇水郷祭プレーパーク（8 月 3 日）

松江市で一番大きなお祭りである水郷祭のイベントの一つとして、プレーパークを行った。このプレーパークは、城西公民館などのいくつかの公民館、水郷祭実行委

員会の方々、青年会の方々などの協力を得て実現した。

当日は晴天に恵まれ、太陽が照りつける中での開園となった。まず、子どもたちとプレリーダーとの水のかけあいから始まった。子どもは、ホースを渡すものかとリーダーに水をかけ、自分たちもびしょびしょになりながら元気に駆け回っていた。

そのかたわらでは、地域のお年寄りの方々がしめ縄を作ったり、竹とんぼをつくったりそれを見て教えてもらっている子どもも多くいた。さまざまな年齢の人たちがその日プレーパークにはいた。この日一番感じたのは、地域の方々の協力の力強さだ。準備から全てにわたって協力してくださり、子どもたちを含めて私たちもいつも以上にのびのびと開園を楽しむことができた。

○市民文化祭（10 月 4,5,11,12 日）

市の主催によって毎年開かれるこの文化祭は、プレーパークを広くアピールできるいい機会だった。私たちは、ベーゴマを実演しながら、プレーパークについての説明や開園日などを出会った多くの人に紹介することができた。

○持田地域ふるさと祭り（11 月 2 日）

持田での地域行事。普段交流できない方々といろいろと話すことができた。プレーパークをほとんどの方が知っておられたことはよくわかったのだが、その詳しい内容までは、知らない方が多くおられた。これからも地域行事などに参加していく中でプレーパークのことについて広く理解して頂きたいと思った。

③－1　持田の夏祭りで、地域の方々と盆踊りを踊るメンバー

③－2　水郷祭プレーパークの様子

←③－3

プレーパーク開園時に設置してある看板。「自分の責任で自由に遊ぶ」というプレーパークのモットーを理解して頂くために設置。写真は、水郷祭プレーパークの時のもの。

③－4　しめ縄作りをされている地域の方々

③－5　子どもと話す地域の方

④研修

研修は、プレリーダーのスキルアップと仲間同士の親睦を深めるために行った。一回目の研修は、三瓶研修（9 月 7,8,9 日）で、大田市にある独立行政法人三瓶青 年の家で行った。白潟公民館の松本祥一氏を迎え、持田プレーパークの立ち上げ当初の話や、地域と上手くつきあっていくためにはどうしていけばよいのかということを講義して頂いた。地域の方々の協力と理解を得るために一人一人どうのようにしていけばいいか真摯に考えることができた。その後、松本さんをアドバイザーとして、リスク（予測できる危険）とハザード（予測できない危険）について話し合った。

また、遊びに幅を持たすことができるロープワーク研修、事故が起きたときの対処として、応急救護講習を受けた。この研修では、普段経験することのないことをメンバー全員で考えることができ、とても有意義な時間をすごせたと思う。

二回目の研修は、大学内の学生会館にて行った。講師として、松本氏、もう一人、東京から羽根木プレーパークの伊藤博之氏を招いて、講話、ディベートを行った。特に講話では、日本で初めてできたプレーパークである、羽根木プレーパークの遊びや直面している問題など、現在の自分たちにも当てはまる事柄について考えることができた。

⑤アンケート調査

開園に来ておられた保護者の方何人かにアンケートを行った。そのアンケートで関心を引かれた意見について簡単に述べる。

- 家の近くでは、このような遊びができないので、おおいに参加させたい。
- 親が何とも思わないことでも、なぜか子どもが喜んでいるので不思議。
- 前回初めて来たとき、「何をしていいかわからない」といっていた子どもも今日の様子を見ると楽しんでいたので、少しずつ慣れていっていることを嬉しく思います。

など。

家の近くでは、自由に遊べないことや子ども独自の自由な遊びで楽しんでいることなど、プレーパークの役割を感じた反面、初めてきた子どもたちにとっては親しみづらい遊び場だと感じた。初めてきた子どもには、プレリーダーが遊びに誘うなど改善点も考える必要性がある。アンケートに答えていただけなかった方々にも、他に色々な思いがあると思うので、今後も定期的にアンケートを繰り返して、色々な意見を取り入れていけたらと考える。

平成15年度　活動実績

月	日	開園･研修･イベント等	見学･視察･取材
4	12	デリバリープレーパーク（菅田公園）	
	19	デリバリープレーパーク（総合運動公園）	
	27	もちだプレーパーキング	
5	5	もちだプレーパーキング	
	10	デリバリープレーパーク（楽山公園）	
	24	もちだプレーパーキング	
	25	もちだプレーパーキング	
6	7	デリバリープレーパーク（北公園）	
	14	もちだプレーパーキング	
	15	もちだプレーパーキング	
7	5	もちだプレーパーキング	
	6	もちだプレーパーキング	
	26	持田地域夏祭り　参加	
	29	デリバリープレーパーク（北公園）	
8	3	水郷祭　参加	山陰中央新報
	5	デリバリープレーパーク（菅田公園）	
	9	デリバリープレーパーク（大田市）	
	23	もちだプレーパーキング	
	24	もちだプレーパーキング	
9	7	三瓶研修（三瓶青年の家にて宿泊研修）	
	8	三瓶研修	
	9	三瓶研修	
	13	もちだプレーパーキング	
	14	もちだプレーパーキング	
	20	もちだプレーパーキング	
	23	デリバリープレーパーク（総合運動公園）	
10	4	市民文化祭　参加	
	5	市民文化祭　参加	
	11	市民文化祭　参加	
	12	市民文化祭　参加	
	18	デリバリープレーパーク（くすのき広場）	出雲市女性センター依頼
	25	もちだプレーパーキング	
	26	もちだプレーパーキング	
11	2	持田地域ふるさとまつり　参加	
	15	もちだプレーパーキング	子育て支援センター
			フィールドワーク
	16	もちだプレーパーキング	
	23	デリバリープレーパーク（楽山公園）	
	29	もちだプレーパーキング	
12	6	もちだプレーパーキング	
	7	研修（島根大学学生会館）	講師：
	13	デリバリープレーパーク（北公園）	

	14	デリバリープレーパーク(北公園)				
12	20	もちだプレーパーキング				
	21	もちだプレーパーキング				
	23	もちだプレーパーキング				
1	17	もちだプレーパーキング				
	18	もちだプレーパーキング				
	25	もちだプレーパーキング				
2	21	もちだプレーパーキング				
	22	もちだプレーパーキング				
	28	もちだプレーパーキング				
	29	もちだプレーパーキング				
3	6	もちだプレーパーキング				
	7	もちだプレーパーキング				
	27	もちだプレーパーキング				
		香川プレーパーク開園協力				
	28	もちだプレーパーキング				

	来園者数（持田プレーパーキングのみ）				
4月	3回	60人	10月	2回	95人
5月	4回	94人	11月	3回	96人
6月	3回	157人	12月	4回	92人
7月	3回	84人	1月	3回	58人
8月	4回	116人	2月	4回	145人
9月	3回	141人	3月	4回	68人
			年間来園者数		約1206人

III.活動の成果と今後の課題

1,活動の成果

子どもたちは、プレーパークを通じて多くのことを学んだのではないだろうか。今の子どもたちは、同じクラスの同じ年齢の友だちとしか遊ばない。学校が違えば当然遊ぶ訳がない。しかし、このプレーパークには、さまざまな年齢、さまざまな学校の子どもたちが集まる。最初は戸惑っている子もいつのまにかどんな子とも遊ぶようになっている。年上の子は年下の子を気遣い、年下の子は年上の子を慕う。そんな光景がプレーパークにはいたるところで見ることができる。子どもたちは、自由な遊びの中から人間関係を学び、仲間と協力していくことを知っていく。遊びは子どもにとって自然なものであり、大人が理解不能なことも遊びに変化させ、何かを学んでいく。プレーパークは、今の子どもが内に押し込めている好奇心を刺激し、満たすことができる場だと改めて実感することができた。

また、プレーパークは単に子どもたちの遊び場というだけでなく、社会的役割を担うことができると考える。地域の方々がプレーパークに訪れることで、子どもたちにその地域の風習や伝統などを伝えていくことができ、子どもたちは、地域の方と触れ合うことでの世代間での交流をもつことができる。今、重要視されている地域の教育力がそこにはある。さまざまな世代が集まるということで、保護者の方同士が子育てに関して悩んでいることや困っていることなどを相談しあえる場にもなっている。

また、公民館の方がおっしゃられたことに「地域にとって、プレーパークを通して地域に私たち大学生が来ることは、その地域に刺激を与え、地域の活性力につながる」というのがある。持田のプレーパークをきっかけに地域の方や行政が加わったプレーパークが山陰地方では徐々に増えていることもあり、地域の活性力としての一面もあると感じた。

私たち大学生は、このプレーパーク活動を通して多くのものを得た。プレーパークでは、私たちと子どもは対等な立場である。指導者や生徒、大人や子どもという関係ではなく、年の離れた友だちのような関係である。そんな関係で子どもたちと接していると、偏見や間違った価値観なしに子どもたちを見ることができる。「子どもは日々成長している」大学の講義で学んだ、そんな当たり前のことも、実際の経験として感じることができるのだ。また、プレーパークの活動には島根大学のさまざまな学部の学生が参加しているのだが、自分たちの専門領域以外である子どもとの関わりを通して、一人一人が子ども、地域に対して興味を持ち、新たな経験を求めて他のボランティア活動に参加するなど、大学生活にも変化がみられるようになった。

プレーパークを通じて地域との関わりを持つことも大きな意味があった。地域の方々の理解や協力を得ていくためには、自分の意思や価値観をはっきりと伝えていかねばならない。 地域の方々との関わりを持つために、メンバー同士がそれぞれの価値観をぶつけ合い、新たな価値観を作り上げていく。メンバー同士で切磋琢磨しながら協力し、活動に取り組む中で、学生だけで地域と関わりを持っていくことの難しさ、学生ができることの可能性を感じることができた。

2,今後の課題

プレーパークは、地域の方々の協力や理解がなければ成り立たない。この活動を今後とも継続していくためには、よりいっそうの地域の方々の理解・協力が必要となってくるだろう。プレーパークの情報をどのように地域に発信していくか、理解を求めていくためには何が必要なのかを今後とも模索していく必要があると考える。また、地域の子ども会などとは違うというプレーパークの独自性も考えていく必要があるだろう。

プレーパークの各地域への広がりを目指す中で、他の団体・行政との連携も重要である。マスコミへの呼びかけ、他団体への参加・協力、行政への活動報告など、さまざまな働きかけが考えられる。その中で、今自分たちができる取り組みを吟味し、実践していくことで、連携をとっていけたらと思う。

メンバーは、現在、プレーパークの開園にばかり意識をとられているように感じる。今後とも学生が主体となって取り組んで行くためには、運営へのメンバーの意識の高まりが必要である。子どもと遊ぶだけでなく、運営にも主体的に取り組んでいくために、運営組織の再構成、意識向上のための研修などに取り組んでいこうと考える。

前の発表 TOP 次の発表